『デンマーク・コネクション』

シャーロットとジューンの冒険物語３

作　高橋広間

登場人物

シャーロット

ジューン

ハイの人（通訳）

少　女　（マッチ売りの少女）

妖　精　（妖精）

マッチ　（妖精）

侍　女　（妖精）

女　王　（この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王）

１．プロローグ

北欧の入口、デンマークの首都コペンハーゲン。
舞台上には「リンゴ」がポツンと１個。宙に浮いていたりする。ただものではないらしい、たぶん。

オープニング・ショータイム。全員参加。
デンマーク風の衣装とデンマーク風の踊り。
市内の中央にある有名な遊園地では、朝から夜中まで楽しいアトラクションが演じられている。
デンマークはグルメの国である。だから、フォークダンスが、フォークを使ったダンスであっても、別に不思議はない。

踊りの中から、シャーロット、ジューンが登場。
観光客である。ジューンはトウモロコシを食べながら、包み紙の新聞紙を読みながら。シャーロットは手帳のメモとガイドマップをチェックしながら。
人魚姫の像のある海辺の公園。

シャーロット　えーと、焼きトウモロコシとジャガバター焼は、これでクリアね。（見回して）ここよ、ここ。このあたりよ、アンデルセンの人魚姫の像。本当の失恋を味わった女なら、一生に一度は訪ねてみたい、世界三大名所の一つよね。えーと、どれかしら…。
ジューン　（新聞を見ながら）あれ…。
シャーロット　どれ？
ジューン　これ…。
シャーロット　ん？
ジューン　これ…。
シャーロット　どうしたの？
ジューン　デンマーク語だから読めないわ。
シャーロット　あのねえ、ジューン…。
ジューン　ごめん、シャーロット。ほら「アンデルセン」っていう単語と「７月１０日」の日付はわかるのよ。つまり、今日のことでしょう。
シャーロット　（そっけなく）アンデルセン記念日じゃないの？
ジューン　何、それ？
シャーロット　アンデルセンの誕生日。
ジューン　それは４月２日

シャーロット　じゃあ命日。
ジューン　８月４日。
シャーロット　結婚記念日。
ジューン　一生独身。
シャーロット　初めて童話の本を出した日とか。
ジューン　それは２月。
シャーロット　初めての失恋。
ジューン　１８３０年の冬。
シャーロット　二度目の失恋。
ジューン　３２年の冬。
シャーロット　一番大きな失恋。
ジューン　４０年の秋。
シャーロット　うーん、手がかりがないわね。私の直感も鈍ったものね。
ジューン　あてずっぽうで言ってないで、この記事を見てよ。
シャーロット　あ、そうね。（さらりと見て）なんだ。これ、マッチ売りの少女の話でしょ。
ジューン　それは大晦日の物語。
シャーロット　でも、これはそのマッチについての記事なのよ。
ジューン　へえー。それで今日、マッチがどうなるの？　もっと詳しく読んで。
シャーロット　え、詳しく？　えーと・・・（読み始めるが眠ってしまう）グー。
ジューン　ー　ちょっと。シャーロット。（起こす）
シャーロット　ごめん。私、アレルギー体質でね、文字が多いとつい眠くなるのよ。えーと（読み始めるが眠ってしまう）グー。
ジューン　ちょっと。シャーロット。（起こす）どうしてこれが、マッチ売りの少女の記事だって、わかったの？
シャーロット　それは簡単。イラストはマッチ売りの少女でしょう。だから、この単語はきっと「マッチ」っていう意味で、同じ形のスペルが、ほら、いっぱい出てきているから、そういう記事かな、って。
ジューン　（感心して）たいした推理ね。
シャーロット　いやいや。むしろ、女の勘ってやつね。だいたい、かわいい子は文字の多い文章は苦手だからね。本や新聞を読む前に、男からジャンジャンメッセージが入ってきて、もううるさいったらありゃしない。
ジューン　そのかわりに、だんだん勘が鋭くなってくるのね。
シャーロット　そう、それが女の武器よ。フッ。
ジューン　なるほど。でも、あなたはフラれたんだから、もう本を読む時間はたっぷりあるんじゃない？
シャーロット　グサ。
ジューン　メッセージもほとんど入ってこないだろうし。
シャーロット　グサ。
ジューン　人間、誰でもモテる時期があるんだって。でも長くは続かないらしいわよ。

シャーロット　グサ。
ジューン　夢も希望もないわよね。
シャーロット　グサ。・・・ジューン、おたがいさまじゃない。
ジューン　グサ。
２　人　・・・絶対キレイになってやる！

やおら、それぞれにトレーニングを始める。

ジューン　あー、お腹がすいた。
シャーロット　うん。早く人魚姫の像におまいりして、食べに行こう。えーと、あ、あれかな。（歩み寄る）
ジューン　意外に小さいのね。
シャーロット　ポーズが色っぽいわね。（真似をして）うっふん。さ、おさいせん。
ジューン　（引き止めて）待って、シャーロット。・・・平気かな。
シャーロット　何が？
ジューン　悪いことは起こらないかな？
シャーロット　どうして？
ジューン　だって、人魚の声に耳を貸すと不幸になる、って・・・。
シャーロット　それは誰かのお芝居のセリフでしょ。大丈夫よ。人魚姫は恋の守り神なんだから。おさいせんをあげて、一生懸命に拝めば、きっといいことがあるわ。
ジューン　そうね。

２人、賽銭を投げ、拝む。

ジューン　（海をながめ）この港の向こうがバルト海ね。
シャーロット　そして、その海の底深くに、人魚たちは暮らしているのよ。
ジューン　やっちゃおうか。
シャーロット　あの名シーンの再現ね。
ジューン　（芝居がかって）見渡す限りの大海原。
シャーロット　どこまでも続く水平線。
ジューン　降り注ぐような満天の星。
シャーロット　そして人魚姫の伝説。
２　人　海には男の・・・、（耐え切れずに叫ぶ）バカヤロー！
ジューン　（興奮を抑えて）「男の」ってくると、どうしても「バカヤロー！」って叫んじゃうよね。
シャーロット　「男のロマンがある」って言うから名シーンなのにね。
ジューン　条件反射だから仕方ないか。
シャーロット　叫ぶと、ますますお腹がすくわ。
ジューン　次のターゲットは？

シャーロット　ここはどう？　デンマーク料理食べ放題、３８０クローネポッキリ。おいしいものが一度に食べられるんじゃないかな。
ジューン　デンマークはグルメの国だものね。
シャーロット　チーズやハムやローストポーク。
ジューン　欠かせないのが生ビール。
シャーロット　シーフードもたっぷり。
ジューン　今ならイカの踊り食い。
シャーロット　キャビアの山盛り。
ジューン　小海老とニシンのビネガーあえ。
シャーロット　パンだっておいしいのよ。もともとデニッシュっていうのは、デンマークのパンっていう意味よ。
ジューン　もう、ヤケ食いだけの人生ね、私たち。
シャーロット　（ポツリと）でも、食べ終わったあと、なぜかむなしいのよね・・・。

その時、妖精が現れる。

妖　精　トゥルトゥトゥトゥトゥトゥトゥ、タラトゥララー

ジューンの目の前を横切って、消える。シャーロットは見ていない。

ジューン　あれ？（シャーロットに）今の見た？
シャーロット　見てない。
ジューン　走って行ったの、ウサギが・・・。
シャーロット　ウサギぐらいいるんじゃない？　だって、ここは北の国への入口なのよ。この先は、森と山と湖しかないんだもの、ウサギぐらい。
ジューン　でも、へんなウサギ。こんな格好をしていて、マッチョなの。
シャーロット　お腹がすくと、幻覚を見るらしいよ。
ジューン　そうね。

妖精が現れる。

妖　精　トゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥ、タラトゥララー

シャーロットの目の前を横切って、消える。ジューンは見ていない。

シャーロット　あれ？（ジューンに）本当にいた。
ジューン　でしょう。いるのよ、ここはメルヘンの国だもの。マッチ売りの少女や、みにくいアヒルの子や、雪の女王が今でも住んでいると言われる、西の文明の行き止まり。

シャーロット　そもそもデンマークっていうのは、伝説がそのままマークされているっていう意味だしね。
ジューン　それは嘘でしょ。
シャーロット　本当よ。
ジューン　嘘。信じられない。
シャーロット　本当だってば。（妖精の気配に）・・・また来たわ。
ジューン　見ないふり。

妖精が現れる。

妖　精　トウトウトウトウトウトウ、タラトウララー

シャーロット、ジューン、さっさと立ち去ろうとする。妖精はわざと見つかろうとする。
怖くなったシャーロット、ジューンは、妖精を押し退けて逃げようとし、力余って突き飛ばしてしまう。

妖　精　（怒って）ちょっと待ってよ！
ジューン　ごめんなさい！お金は置いて行きますから、命だけは助けて！
シャーロット　私たち、きっとおいしくないと思います。こう見えても着太りする性質（たち）で、中身は骨と皮ばかりなんです。
妖　精　（あきれて）ちょっと待ってよ、何それ。
ジューン　他には、あいにく何も・・・
妖　精　なんなの、それ。呼んでおいて、それはないでしょう。
ジューン　？　あの・・・、私たち、お呼びしました？
妖　精　呼んだじゃない、大きな声で。
シャーロット　人違いじゃありません？
妖　精　忘れっぽいなあ。じゃあ、再現するよ。海には男の・・・！
シャーロット・ジューン　（思わず叫ぶ）バカヤロー！
妖　精　ほらね。
ジューン　じゃあ、あなた、バカヤローさん？
妖　精　（手で制して）そういう単純な発想しかできないから、すぐ男にフラれるんだよ。
ジューン　すみません。
シャーロット　・・・。（笑いをこらえている）
妖　精　（シャーロットに）あんたもだよ。
シャーロット　・・・すみません。
妖　精　もっと内面を見なくちゃ。バカヤロー！の裏に隠された本当の気持ちがあるだろう。腹の底からこうこみあげてきて、バカヤローと声をあげながら、心

の奥で叫んでいた本当の気持ちは「男なら誰でもいい！」だったんじゃないのか？　私がその“誰でもいい男”だ。

シャーロット・ジューン　（不満気に）えー。

妖　精　呼ばれて来ただけなんだからね。「誰でもいいから男が欲しい」っていう要請があったから、その姿で登場したんだからね。

シャーロット　その姿で、って、あんた何者？

妖　精　要請を受けて登場するのは、妖精だよ。

ジューン　妖怪じゃないの？

妖　精　それはモノを頼んだ時に「何か用かい」って現れるの。

シャーロット　じゃああんた、美形の少年が欲しい、って思うとその姿で現れるの？

妖　精　そうだよ。要請されればね。

シャーロット　やってみよう。（叫ぶ）かわいい男の子が欲しい！

妖　精　トウトウトウトウトウトウ、タラトゥララー

妖精はそのまま。

シャーロット　ならないじゃない。

妖　精　心の底から思っている？　口先だけじゃダメなんだよ。

シャーロット　ちぇっ。

妖　精　口ではそう言いながらも、君たちは私に会えたことを喜んでいるね。

ジューン　お金を取られなかったからホッとしているのよ。

妖　精　（気にせず）君たちのあたたかい気持ちにふれて、私もうれしいよ。じゃあ、また会おう。さらばだ。

妖精、走り去る。

シャーロット・ジューン　なんだ、あいつ。

シャーロット　でも、つきまとわれなくてよかった。

ジューン　あ、そうだ・・・。

シャーロット　どうしたの？

ジューン　（突然に）海には男の、バカヤロー！

シャーロット　（つられて一緒に）　・・・バカヤロー！

妖精が現れる。

妖　精　トウトウトウトウトウトウ、タラトゥララー。なんだよ、一体。

シャーロット　（ジューンに）何よ、また呼んじゃって。

ジューン　（妖精に）ねえ、この記事、どういう意味？

妖　精　（記事をのぞきこんで）ダメだよ。教えられない。

ジューン　私たち、要請しているの。
妖　精　ダメダメ。マッチ売りの少女の持っているドリーミィ・マッチの話は、他人（ひと）にしゃべっちゃいけないんだ。しかも今日は、特別な日だし。聞いても教えられないよ。あきらめな。
シャーロット　今日は特別な日なのね。
妖　精　なんで知っているんだ、それを？！
シャーロット　その記事にも載っているわよ。
妖　精　どれどれ。（見る）おどかすなよ。これは、ドリミィ・マッチをテーマにした芝居が、日本っていう国で今日上演されている、って記事だろう。今日、女王様がマッチ売りの少女をおびきよせようとしている、なんて一言も書いてないじゃないか。
ジューン　マッチ売りの少女をおびきよせる？
妖　精　なんで知っているんだ、それを？！
ジューン　おびきよせてどうするの？
妖　精　そんなこと言えないよ。そのせいで、マッチ売りの少女からドリーミィ・マッチを取り上げるのに失敗したら、どんなめに合わされるかわからないからな。ダメダメ。じゃ、行くからな。あばよ。

妖精、走り去る。
シャーロット、ジューン、目でうなずきあって。

シャーロット・ジューン　海には男の、バカヤロー！

ややあって、妖精が現れる。

妖　精　なんだよ。
シャーロット　ドリーミィ・マッチって、ドリーミィなの？
妖　精　（当然とばかりに）ドリーミィでしょ。マッチを擦ると、夢の世界がパァーッとひろがるんだぜ。
ジューン　昔、マッチ売りの少女が死ぬ間際に見た夢は、それね。
妖　精　そう。今は何代目かのマッチ売りの少女が持ってる。いけね、急がなくちゃ。
ジューン　どこ行くの？
妖　精　女王のお城だよ。
ジューン　どこにあるの、それ。
妖　精　秘密だ。
シャーロット　（さも知っているように）ああ、あそこか。
妖　精　え、知っているのか？
シャーロット　あそこが入口よね。
ジューン　そうね、秘密の入口はね。

妖　精　おい。それって、女神の泉の噴水のこと？それとも、教会の裏の石垣のことかな？
ジューン　教会の裏の石垣の入口。
妖　精　（安心して）なあんだ。秘密だ、教えられない。じゃ、今度こそ、あばよ。

妖精、走り去る。

シャーロット　正解は、女神の泉の噴水か。
ジューン　夢を見せてくれるドリーミィ・マッチか。
シャーロット　でも、それは一瞬の幻。
ジューン　もしかすると、マッチでトリップしちゃう新種のドラッグかもしれないわ。背後には、麻薬組織デンマークコネクションをめぐる事件の数々。
シャーロット　（興味津々に）関わるのは危険ね。
ジューン　危険だけど、興味あるわね。
シャーロット　一瞬の幻に惑わされてみる？
ジューン　うん。マッチが私たちを誘っているわ。
シャーロット・ジューン　行こう、女王のお城へ！
ジューン　おっと、その前に。
シャーロット　わかってる、腹ごしらえでしょ。デンマーク料理食べ放題３８０クローネポッキリ、やったねっ！
ジューン　違うの。実は通訳の人をお願いしているのよ。そのほうが、おいしいものを食べるときに、シェフの説明やアドバイスが聞けるでしょ。デンマーク語じゃチンプンカンプンだもの。ここで待ち合わせなんだけど、そろそろ約束の時間だから、一緒に行ってもらおうよ。
シャーロット　うん。

ハイの人登場。なぜか意味もなく底抜けに明るいキャラクター。ハイの人は相手の気持ちに反応する。

ジューン　あ、あの人かしら。すみません。ハロー。
ハイの人　（２人に気づき）はあい！
ジューン　通訳の方ですね。
ハイの人　はい。
ジューン　とりあえず、一緒に来てください。
シャーロット　よろしくお願いします。

ジューン、シャーロット、ハイの人を連れて走って退場。おっと、その前に、人魚姫の像に軽く手を合わせてから。

2・マッチ売りの少女の第一場

幕間。曲が流れる。
妖精、登場。花道から走り去る。
シャーロット、ジューン、ハイの人、登場。そのまま退場。
少女、花道から登場。退場。
侍女、登場。リンゴを台に乗せて控える。
マッチの精、登場。そのまま退場。
侍女は、台を定位置へ持っていく。

女王の城。
女王が現れる。女王は異様に美しい。舞台や客席を見下ろすように、いつも高い位置に現れる。

女王　リンゴよ、リンゴ。この世で一番美しいのは誰？
侍女　（リンゴとして）それは女王様、それはあなた様でございます。
女王　そうよね。リンゴは不思議、リンゴは素敵。ホホホホホ。・・・リンゴよ、リンゴ。この世で一番美しいのは誰？
侍女　（リンゴとして）白雪姫です。
女王　毒盛って殺しておしまい！
侍女　（リンゴとして）じょ、冗談ですぅ。
女王　ん？冗談？　そうよね、私（わたくし）よね。だって女王ですもの。リンゴよ、リンゴ。遠いいにしえより禁断の果実と呼ばれるリンゴ、その美しさゆえ全ての果実の女王の名を持つリンゴよ。あなたと私は、とても似ているわ。ホーホホホホ・・・。

少女が現れる。どうも迷いこんだらしい。リンゴを見つけて持ち去ろうとする。

女王　こら、子ども！　私のリンゴをどうしようというのです？

少女、声しか聞こえず、キョロキョロする。

女王　ここですよ、ここ。
少女　（侍女に教えられて女王に気づき）うおー。

少女、何事もなかったようにリンゴを持ち去ろうとする。

女王　こら、子ども！　リンゴを置いて行きなさい。
少女　え、このリンゴ、おばさんのなんですか？
女王　私のどこがおばさんです？　私はこの世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様です。
少女　はいはい。ようするに、女王様のなんですか？
女王　ようするな！
少女　ようするに、この世で一番美しい女王様のなんですか？
女王　ようするな！！　この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様です。
少女　・・・さよなら。（リンゴを持ち去ろうとする）
女王　こら、子ども！　リンゴを置いて行きなさい。
少女　（かわいらしく）これ、私にいただけないかしら？　この甘い香り、とてもおいしそうなんですもの。
女王　香り？　おいしそう？　ホホホホホ。子どもは子どもね。そんなたわいもないことで、リンゴを欲しがるなんて。
少女　それに、とてもきれいだわ。
女王　（聞きとがめて）とてもきれい？　私よりもきれいだと？

不気味な地鳴り。

少女　え？　い、いえ。私の勘違いでした。ごめんなさい！

地鳴りおさまる。

女王　そうであろう。きれい、それは私のための言葉です。
少女　そうですか。それじゃ、そーゆーことで。（去ろうとする）
女王　こら、子ども！　リンゴを置いて行きなさい。
少女　（神妙に）この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様、私はかわいそうな少女です。ぜひ助けると思って、リンゴを私にくださいませんか？
女王　かわいそう？　どこがです？
少女　このリンゴに恋わずらいして、夜も眠れない乙女の不眠症。
侍女　はずれのブザー。ブー。
女王　残念ね。あいにく私は、ごんぎつねとマッチ売りの少女以外に「かわいそう」という形容詞は認めないのよ。
少女　それっ。それよ、それ。
侍女　ソレソレソレソレ、ソーレソレソレソレ
少女　（踊りかけて）そうじゃなくて。私がその「マッチ売りの少女」なのよ。

女王　ホホホ。まさか。
少女　ほら、（順に見せながら）マッチ、瓜、少女。ね。
侍女　正解のチャイム。ピンポンピンポン。
女王　かえって、うさんくさい気もしますが。
少女　本当だってば。
女王　よろしい。では、そのマッチの束の中には、夢の世界がひろがるというドリーミィ・マッチもあるのですね。
少女　あたりきよ。（小さな声で）たぶん…。
女王　しかし、あなたは少しもかわいそうに見えませんね。
少女　（とてもかわいそうにする）
女王　まあよい。「かわいそう」はマッチ売りの少女の枕詞なのだから。
少女　そうそう。
女王　それではこうしましょう。私がそのマッチ、全て引き取りましょう。さあ、喜びなさい。
少女　え？　あの…、私はリンゴが…。
女王　遠慮せずともよい。マッチが全て売れれば、あなたは「かわいそう」でも「マッチ売り」でもなくなるのですよ。ですから、私が全てのマッチを引き取りましょう。どうです、私はよい人なのですよ。美しい人がみな悪人とは限りません。ホーホホホホ。さあ、マッチをこちらに…。
少女　それはだめよ。マッチは1本ずつ、火をつけてさしあげる、そういうことになっているの。
女王　気にすることはない。全てよこしなさい。
少女　だめよ、決まりだもの。
女王　そうカタく考えずともよい。
少女　だめだめ。だって自分で決めたんだもの。
女王　では、歩み寄りましょう。全部とは言うまい、ドリーミィ・マッチだけこちらによこしなさい。
少女　そういう大人、多いのよね、自分だけ夢を見ようとするの。でも、おあいにくさま、擦ってみなくちゃわからないの。だって、普通のマッチと全然見分けがつかないんだもの。
女王　融通のきかない子どもだこと。
少女　だったら1本ずつ買ってくれればいいじゃない。ドリーミィ・マッチにあたるまで、擦ってあげるわよ。
女王　擦ってしまっては手遅れなのですよ！　子ども、これは命令です。マッチを全てよこしなさい。
少女　だめなんだってば。…じゃあ、こうしない？　このリンゴを私にくれたら、そのお礼にマッチを全部置いていくわ。どう？
女王　なるほど。よろしい、その取引のりましょう。
少女　じゃあ、このリンゴいただくわね。で、このマッチを…。さよなら！

少女、マッチとリンゴを持ったまま、走り去る。
が、反対側から登場。少女は十分に逃げたつもりである。

少女　（女王に気がつき）うおー。

少女、逃げようとするが、侍女の術（みえない吹き矢）につかまり連れ戻される。

女王　ホーホッホホホ。あなたの考えそうなことぐらいお見通しですよ。子ども、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様をだまそうとは、身の程知らずな。もっと大人にならなくては。

少女　大人？　冗談じゃないわ。

女王　今はそう思っていても、いずれはすてきなレディにあこがれるものですよ。

少女　やめてよ、柄じゃないわ。

女王　あなただって、いつまでもツッぱってはいられないでしょう。年頃になれば、みんなツッパリは卒業するのです。髪の毛も黒くストレートにして、口紅も紫やブラックはやめて、ピンクかローズ。そうやって、みんな少しずつ大人になってゆくのです。…お隣のアンナ、最近見違えるようになったって思わない？　幼なじみのサリー、色っぽくなったって評判よ。

少女　あのアバズレがぁ！？

女王　と、あなたが思ったって、世間の人には評判いいんだから。あなたはいいの？　のりおくれるわよ？　…どうです、子ども。大人に、すてきなレディになりたいと思いませんか？

少女　うーん…。

女王　私があなたを、一人前のレディにしてみせましょう。しかも今ならすてきなレディに欠かせない「ラッキーカムカム３点セット」もついてくるわのよ。いかが？

侍女、少女に３点セットを見せびらかし、リンゴと交換してしまう。

少女　やってみても、いいかな。

女王　ホホホ。よろしい、あなたを一人前のレディに！

女王が手をあげると、吹雪が起こる。
少女、思わず逃げようとするが、風に巻かれて退場。
侍女はリンゴを持って、女王は吹雪とともに退場する。

3　・ジューンとシャーロットの第一場

女神の泉と呼ばれる噴水。噴水の向こう側は大きな池になっている。
シャーロット、ジューン、ハイの人、走りこんでくる。
なお当然のことだが、〔　〕内のセリフは、雰囲気が伝わればよい。
忠実に再現することは望んでいない。

ジューン　これが、女神の泉っていう噴水ね。
シャーロット　（客席に）ガアガアガア。
ジューン　どこが入口になるのかしら。
シャーロット　（客席に）ガガアガア。
ジューン　何しているの？
シャーロット　情報収集。この池のアヒルに話しかけているのよ。
ジューン　アヒルの言葉がわかるの？
シャーロット　全然通じないんだけどね、女の勘でなんとかなるんじゃない？
ジューン　ならないと思うな。
シャーロット　（客席を見ながら）ねえ、あの人もアヒルかな。
ジューン　え？
シャーロット　ほら、あの人よ、あの人。（と指を差しかける）
ジューン　指を差すんじゃないの。いいのよ、今はともかく、きっといずれは白鳥になる人なのよ。
シャーロット　ああ、みにくいアヒルの子ね。
ジューン　いいのよ、そこまで言わなくても。
シャーロット　そうかそうか。
ハイの人　（２人の間に割って入って）はいはい。
ジューン　あ、ごめんなさい、挨拶もなしに連れ回しちゃって。私がジューンです。よろしく。
ハイの人　はい。〔よろしく〕

ハイの人、ジューンと握手する。

シャーロット　私、シャーロットです。よろしく。
ハイの人　はい。〔よろしく〕

ハイの人、シャーロットと握手する。

ジューン　ところでお名前は？

ハイの人　はい？　〔？〕
ジューン　お名前は？
ハイの人　はい？　〔？〕
ジューン　てめえ、名前がねえのかよっ。
ハイの人　（怒って）はいはいはいはいはいっ。
シャーロット　あの・・・、ハイさんですか？
ハイの人　はい？　〔？〕
シャーロット　ハイさん、って呼んでもいいですか？
ハイの人　はーい。　〔いいですよ〕
シャーロット　（ジューンに）ハイさんだって。
ジューン　（シャーロットに）「ハイ」しか喋れないのかしら、この人。
ハイの人　はい。　〔そのとおり〕
ジューン　失敗だわ。通訳の紹介所で、料金表の下から二番目を選んだのよ。
シャーロット　一番下は？
ジューン　九官鳥だったかな。
シャーロット　・・・まあ、通じればいいのよ。
ジューン　悪いけどお断りしない？　だって通訳にならないわよ。
ハイの人　はい、はい！（胸を叩く）　〔大丈夫！〕
シャーロット・ジューン　（顔を見合せ）わかるんだ・・・。
ハイの人　はーい。　〔わかります。気持ちは充分に〕
シャーロット　言葉は少しだけど、心で会話ができるのね。
ジューン　何、言ってるの。言葉を知らない通訳なんて
シャーロット　意外性があって、気が利いているわよねぇ。
ジューン　うん。（気がついて）なんでよ。

妖精、マッチの精、登場する。

妖　精　（３人に気づいて）あ、まずい。（逃げようとする）
シャーロット　（見つけて）あっ、妖精！
妖　精　また、君たちかよ。
ジューン　もしかして、私たちに会いに来たの？
妖　精　違うよ。
シャーロット　私たちがかわいいからね。
マッチ　（ポツリと）ありえないな。
ジューン　そうだ。あんた、心の底から困っていることがあると助けてくれるのよね。
妖　精　そんなこと、言ってないよ。
ジューン　妖精があると現れるんでしょ。
妖　精　現れるだけだよ。
ジューン　えー。

シャーロット　ねえ、女王のお城に行くんじゃなかったの？
妖　精　忘れ物をしちゃったんだよ。こいつを連れて行くんだ。
シャーロット　ちょうどよかった、一緒に行こう。
妖　精　君たちも女王様に呼ばれているの？
シャーロット　そう。
ジューン　そうそう。
妖　精　本当かい？　人間は嘘をつくからな。
シャーロット　本当は、お城に用事があるの。
妖　精　そうだろう。女王様はキチンとしたキレイ好きなお方だから、君たちみたいに言葉遣いが悪いと、たいへんなめに合うらしいからな。
ジューン　（緊張して）私は、その点は大丈夫だと思いますですわよ。
シャーロット　（緊張して）私も平気じゃないかと、思う気がしますだわ。
ハイの人　はあい。〔へんな感じ〕
妖　精　君たち、敬語が使えないのか。
ジューン　その子は言葉を知らないのよ。
妖　精　あんたもへんだったよ。
ジューン　ゲ。
シャーロット　ねえ、この子に言葉を教えられない？　私たち、困っているのよ。
妖　精　（ハイの人を見て）本人は困っていないみたいだけど？
ジューン　自覚がないだけなのよ。
妖　精　ふーん…。今からちょうど１００年くらい前に、見えない聞こえない喋れない、の三重苦の子どもに言葉を教えた方法があるんだ。そいつを使おう。
マッチ　（マッチの精に）な。
ジューン　いいよ。
マッチ　どんな方法？
　おいで。

マッチの精、ジューンを連れて退場。

ハイの人　はい？
シャーロット　〔何をしようとしているの？〕
　え、何？
ハイの人　はい？
妖　精　〔どこに行ったの？〕
シャーロット　本当に言葉を知らないんだ…。女王様のお城に何の用だい？
妖　精　ちょっとね。
シャーロット　どうしても行かなくちゃならないのか？
妖　精　ま、まあね。
シャーロット　そうか、たいへんだな。まあ、安らかにね。祈ってるよ。
妖　精　待ってよ。なによ、それ。
　いや…。

ジューンの叫び声が聞こえる。

ジューン　（声だけ）キャーッ！（間）キャァ！（間）キャァ！（間）キャアーッ！

ジューン、ずぶぬれで泣きながら登場する。

シャーロット　どうしたの？
ハイの人　はいー？　〔どうしたの？〕
ジューン　ううん。大丈夫。

マッチの精、水をはったタライを持って現れる。

シャーロット　何、これ？

マッチの精、シャーロットの手を取り、いきなり水につける。

マッチ　バシャ。
シャーロット　キャア！
マッチ　（シャーロットの掌に文字を書き）「W」「A」「T」「E」「R」　WATER！
シャーロット　え？

マッチの精、シャーロットの手を水につける。

マッチ　バシャ。WATER！
シャーロット　…W、WATER！
妖　精　そのとおり。水の冷たさとWATERという言葉を、同時に感じることで「水とは冷たいWATERである」ことを知る。君には素質がある。
シャーロット　私はべつに、言葉は喋れるのよ。
ジューン　私は、7回ぐらい水をかぶったわ。

みんな、ハイの人がおもしろそうに見ているのに気づく。

ジューン　あなたの番よ。
ハイの人　はい？　〔え、何が？〕

マッチの精、おもむろにハイの人の手を取る。

マッチ　（ハイの人の掌に文字を書き）「W」「A」「T」「E」「R」　WATER！

いきなり水につける。が、ハイの人、身体をひねって避ける。

マッチ　ＷＡＴＥＲ！

いきなり水につける。ハイの人、うまく避ける。

マッチ　（ムキになる）ＷＡＴＥＲ！

いきなり水につける。ハイの人、うまく避けて、マッチの精が顔から水につかる。

ハイの人　（マッチの精の掌に文字を書きながら）「は」「あ」「い」　はあい。

マッチ　えーん。

ハイの人　（マッチの精の掌に文字を書きながら）「は」「あ」「い」

マッチ　え？

ハイの人、マッチの精の手を取り、静かに水につける。その手を顔にあてさせて。

ハイの人　「は」「あ」「い」

マッチ　はあい？

ハイの人　はい。　〔そのとおりよ〕

ハイの人、マッチの精の気持ちを落ちつかせて。

ハイの人　「は」「あ」「い」

マッチ　はあい？

ハイの人　はい。　〔そうそう〕

マッチの精、思いついて地面をパシパシ叩く。ハイの人を見る。

ハイの人　「は」「あ」「い」　はあい。

マッチ　（復唱する）はあい。

マッチの精、手で宙をパタパタする。ハイの人を見る。

ハイの人　「は」「あ」「い」　はあい。

マッチ　（復唱する）はあい。

マッチの精、いろいろ試してみる。世の中の全てが一つ一つの「はあい」なのだ。

ハイの人　（一つずつ答える）「はあい」「はあい」「はあい」「はあい」
マッチ　（感動して）はあい。私の師匠になってくれ。
ハイの人　はい？！はい！！　〔え？！それは困るわ！！〕

マッチの精、ハイの人を追い回す。

シャーロット　また厄介なのが増えた、って思ってるでしょ。
ジューン　ちょっとね。
妖　精　（マッチの精をつかまえて）何やってるんだよ。行くぞ。
マッチ　はいー！

妖精、マッチの精、ポーズをとる。花道に入口が開ける。
２人は花道を走り去る。

シャーロット　あ。池の中に道が・・・。
ジューン　女王のお城への秘密の入口だ。

シャーロット、ジューン、思わず花道から走り去る。

ハイの人　はい！　〔待ってよ！〕

ハイの人、あとを追って花道から走り去る。

4・マッチ売りの少女の第二場

女王の城。
少女、いぶかしげにあたりを見回しながら現れる。
見えない壁に頭をぶつける。

少女　ゴン！　いってぇ！

侍女、台に載せたリンゴを持って、見えない壁をはさんだ反対側に、あわてて登場。

侍女　いけませんっ。そんな言葉を使っては！
少女　なんで、こんな壁があるのよ。
侍女　レディになるためには、越えなければならない壁です。
少女　うっとうしいわね。
侍女　けれど、あなたの欲しがっているリンゴは、ここにあるのですよ。
少女　あっ、しまった。
侍女　では始めましょう。レディのためのベイシックコース！
2人　レッスン1。
侍女　There is a rule to do anything. 物事にはきまりがあります。肉を売るから肉屋。魚を売るから魚屋。パンを売るからパン屋。Repeat.
少女　肉を売るから肉屋。魚を売るから魚屋。パンを売るからパン屋。Repeat.
侍女　Repeat はよろしい。
少女　（真似して）Repeat はよろしい。
侍女　よろしいはよろしい。
少女　（真似して）よろしいはよろしい。
侍女　ちょっと、あなた。
少女　（真似して）ちょっと、あなた。
侍女　（ちょっと難しい振りをつけて）真似しないでよ。
少女　（真似して）真似したいのよ。
侍女　（かなり複雑な振りをつけて）なぜ、私の真似を、するのかしら?！
少女　なぜ、私の真似を・・・（うまく真似できずに）お上手お上手。（ごまかすように）レディのためのベイシックコース！
2人　レッスン1。
侍女　パート2。お芝居を見せるのは？
少女　劇団。
侍女　お菓子を売るのは？
少女　お菓子屋。

侍女　お芝居のあとにお菓子を配る。
少女　おかしな劇団。
侍女　Good-こうしてきまりによって名前がついているのです。よろしいですか。
少女　はーい。
侍女　マッチを売るからマッチ売りの少女。Repeat.
少女　マッチを売るからマッチ売りの少女。Repeat.
侍女　ですから、あなたはマッチを売らなくてはいけません。そういうきまりなのですから。
少女　（抗議するように）ハイハイハイハイハーイ。
侍女　なんですか。
少女　だったら私、リンゴもらいの少女になる。それならリンゴをもらえるんでしょう？
侍女　応用編ですね。宿題にしておきましょう。
少女　（抗議する）ブーブー。
侍女　ブーブーブーブー。（と車の走る音にすり替えてしまう）
２人　（少女もノセられて）ブー。キーッ、バッタン。
侍女　レディのためのベイシックコース！
２人　レッスン２。
侍女　All my loving.　レディにふさわしいもの、それは本気の愛。ですから、レディは「火遊び」をしてはいけません。
少女　ほー。
侍女　あなたの持っているマッチ、それはこちらで預かりましょう。
少女　ハイハイハイハイ。
侍女　なんですか。
少女　それじゃ、タバコも吸えないじゃない。
侍女　ライターをお使いなさい。ライトとは正しいという意味。正しい道を照らすのがライター。レディにはふさわしい持ち物です。
少女　・・・・・？（ＬとＲのスペルが違うと思っているが、英語に自信がないのでツッコめない）
侍女　けれどマッチはいけません。若い女性、つまりミスがマッチを持つことは、すでに「ミス・マッチ」なのです。一人前のレディには、ミスマッチは許されません。さあ、マッチをここに。
少女　・・おかしいわね。
侍女　なにがですか。
少女　マッチ、マッチって、どうしてマッチにこだわるの？
侍女　え、それは・・・。レディのためのベイシックコース！
２人　レッスン３。
侍女　それではおさらいです。肉屋は肉を売る。
少女　肉屋は肉を売る。

侍女　魚屋は魚を売る。
少女　魚屋は魚を売る。
侍女　パン屋はパンを売る。
少女　パン屋はパンを売る。

少女、言いながら遠ざかり、こっそりと退場。

侍女　マッチ売りの少女はマッチを売る。・・・。マッチ売りの少女はマッチを売る。・・・どうしました？（気づいて）あれ？

少女、反対側から現れる。

少女　ありゃ。
侍女　ホホホホホ。こりない子ね。あなたはこの城から逃げだすことなどできないのですよ。ホホホ。
少女　でもね、私、その見えない壁のこっち側にきているのよね。
侍女　あっ、しまった。
少女　（脅すように）そのリンゴ、ちょうだい。
侍女　ちょ、ちょっと待って・・・。（おもむろに術をかける）グイン！
少女　ガシャン！

少女、落ちてきた見えないカプセルに閉じ込められる。

少女　・・・・・・・！　〔しまったっ！ひきょうもの！〕
侍女　ホホホホホ。
少女　・・・・・・・！　〔ようし！〕

少女、ひざまづいて祈り始める。

侍女　おやおや、祈り始めましたね。よいことよ。そうやって素直な心でみんな大人になってゆくのです。ホホホ・・・

少女、祈り続ける。侍女の体がまるで踊るように大きく震え始める。

侍女　・・ホホ、ゴホッゴホッ、体が、体が・・・。

侍女、少女の様子に気づき、カプセルを開く。

侍女　（術を解く）グイーン！

少女　サラマンドラカンドラドラ、サラマンドラカンドラ、サラマンドラ…
侍女　こら、呪文はおやめ！（ポカッと頭を叩く）
少女　痛いわね。
侍女　あたりまえです。叩いたのですから。
少女　あっ、カプセルが開いてる。
侍女　（術をかける）グイン！
少女　ガシャン！　……！　〔出してよ！〕
侍女　ペタペタ。（カプセルに御札を貼る）
少女　……！　〔なにしてるのよ！〕
侍女　呪文を防ぐ魔除けの御札よ。
少女　……！　〔自分の方が魔物のくせに！〕
侍女　（術を解く）グイーン！
少女　（気づかずに）やーい、魔物、魔物！

侍女、少女をひっぱたく。

侍女　（術をかける）グイン！
少女　ガシャン！

カプセルがあるので、少女はしかえしができない。

少女　……！　〔覚えてろ！〕
侍女　ホホホホ…、……。

少女、ふと思いついて、マッチを取り出し、突きつける。
侍女、思わずあとずさりをし、リンゴを転がしたまま、逃げるようにして退場する。
少女、マッチを擦ってみる。世界が一瞬変わったような気がするが、それは気のせい。
マッチの精が現れる。

マッチ　はーい。
少女　え、誰？　誰でもいいわ。私をここから助けてちょうだい。
マッチ　はーい。…無理だな。
少女　なんでよ。
マッチ　だって、本気で助かりたいと思ってない。
少女　思ってるわよ。
マッチ　じゃ、助かれば。
少女　あのね。…じゃ、ヒントをちょうだい、考えるから。

マッチ　言うよ。「はあい」
少女　それで？
マッチ　「はあい」
少女　それから？
マッチ　おわり。
少女　わかんないわよ。意味は？
マッチ　意味はそのままさ。
少女　なんなのよ、一体！

少女、カプセルを叩いて抗議しようとするが、すでにカプセルはない。
少女は転がりだしてしまう。

マッチ　やればできるじゃない。
少女　どうしたの？　確かにカプセルがあったのよ。いつのまに開いたの？
マッチ　溶けたの。
少女　マッチでカプセルが溶けたの？
マッチ　ドリーミィ・マッチだから。
少女　ドリーミィ・マッチだからカプセルが溶けたの？
マッチ　思いこみのカプセルだったから。
少女　あのねえ、いっぺんに言ってくれない？
マッチ　はーい。無口だからしかたがない。
少女　はいはい。どうせ私はおしゃべりよ。
マッチ　うん。
少女　うん、ってね。イライラするなあ。用がすんだら、もう帰れば。
マッチ　そう？　じゃあね。

マッチの精、あっけなく去る。

少女　・・・あっ、私、ここから出られないんだ。おーい、まだ近くにいるなら姿を見せて！

マッチの精、現れる。

マッチ　よかった。私、今、どうかしているのよ。気にしないでね。早く町に帰りたくて、気が動転しているの。だって、こんなわけのわからないところに、一人でまぎれこんでしまったんですもの。私って、とてもさびしがり屋さんだし。そうだ、私、あなたの名前を聞いていなかったわ。あなたとはお友だちにならなくちゃ。ね、そうよね。
おしゃべり。

少　女　あのね。人がおだやかに話していれば、いい気になって…。

マッチの精、スタスタと去りかける。

少　女　（引き止めて）ごめんなさい。私が悪かったわ。お願い、この部屋から出る方法を教えて。

マッチの精、スタスタと去りかける。

少　女　待って！

マッチの精、戻ってくる。

少　女　どこかに出口はあるんでしょう？　知っている？

マッチ　知ってるよ。

少　女　だったら私を助けて。お願い！

マッチの精、スタスタと去りかける。

少　女　私を見捨てないでよ！

マッチ　出口はこっちなんだけど。

少　女　？！　それならそうと、始めから言いなさいよ。

少女、スタスタと去りかける。

マッチ　はーい！

少　女　なによ。（退場する）

マッチ　まっすぐは壁だよ。

少　女　（声だけ）ゴン！（壁にぶつかる）

マッチ　右に曲がるんだ。

マッチの精、退場。

少　女　（顔を出しながら）いってぇ…。

少女、退場する。

5　・ジューンとシャーロットの第二場

女王の城。転がったリンゴ。
マッチの精、逃げこんでくる。

マッチ　わーっ！

追いかけてシャーロット、ジューン、ハイの人が登場する。
マッチの精、３人に取り押さえられる。

ジューン　なんで逃げるのよ！
マッチ　逃げてないよ。
シャーロット　だって、今いなかったじゃない。
マッチ　師匠、なんとか言ってくださいよ。
ハイの人　はい。
マッチ　〔だって逃げたじゃない〕
ジューン　だから帰ってきたでしょう。
マッチ　妖精は逃げたわよ。
ジューン　私が妖精だよ。
マッチ　あんたが？　じゃ、さっきのは？
ジューン　妖精だよ。
マッチ　じゃ、あんたは？
ジューン　妖精だよ。
マッチ　さっきのは？
ジューン　妖精だよ。
シャーロット　あんたは・・・？
マッチ　もう、まぎらわしいなあ。名前は？
ジューン　妖精だよ。
マッチ　ほかに名前はないの？
ジューン　名前は一つあれば充分だろ。
マッチ　そうかなあ・・・。（と考える）
ジューン　演劇やってる奴とか、ネットやってる奴とか、名前をいっぱい持ってたりするけど、そういうなかにろくな奴がいないだろ。
シャーロット・ジューン・ハイの人　そうかなあ・・・。（とトボける）
マッチ　・・・・・。（あたりを見回し）寒いね。
ジューン　（あたりを見回し）寒いね。
シャーロット　ここはどこなの？
マッチ　女王様のお城。
シャーロット　ここが？

ジューン　何もないところね。
ハイの人　はいー。　〔不気味な所ね〕
シャーロット　ねえ、女王様ってどんな人？
ジューン　華やかな人、それとも怖い人？
シャーロット　どっちにしても性格は悪そうな気がするわ。
マッチ　怖いっていうか、怒らせるとたいへんなんだ。たとえば、人が頭からバリバリ食べられてしまったり、煮え湯に放りこまれてスープにされたり、八つ裂きにされてペットの雪男のえさになってしまうとか、そういうことはないらしいんだけど。
シャーロット・ジューン　ほっ。
マッチ　女王様に会った人間は、みんな一人前の大人になって帰って行くんだ。
ジューン　いい話じゃない。
シャーロット　でも、すごいスパルタ方式かもしれないわよ。
マッチ　どっちにしろ君たちは無理だよ。敬語を知らないだろ。
シャーロット・ジューン　ドキ。
マッチ　女王様の名前だって、ちゃんと言えないだろ。
ジューン　えーっとぉ・・・。
マッチ　この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様だ。
シャーロット　無理だと、どうなるの？
マッチ　それは・・・。
シャーロット　ねえ。
マッチ　いや、・・・。
ジューン　黙っていたらわからないわ。
マッチ　わからないから黙っているのに・・・。
ハイの人　（遠くから3人を呼ぶ）はいー。
シャーロット　ねえ。・・・あきらめて、帰らない？
ジューン　・・・そうね、おなかもすいたことだし。（マッチの精に）出口まで送って。
マッチ　無理だ。
ジューン　いいじゃない、送ってくれたって。
マッチ　君たちは帰れない。
ジューン　なんでよ！
シャーロット　それは無責任じゃないの？　私たちをこんなところまで連れてきておいて。
マッチ　勝手についてきたくせに。
ジューン　男って、いつもそうよね。最後には「勝手についてきた」とか、そんな言い逃ればっかり。
シャーロット　損をするのは、いつも女よね。
マッチ　なんなんだよ。
ハイの人　（遠くから）はいー！
マッチ　はいっ！　何ですか、師匠。

ハイの人　はあい。（リンゴを拾って見せる）
マッチ　おーっ。
ジューン　リンゴね。
シャーロット　べつに珍しくないじゃない。
ジューン　今は夏よ。なのに、こんなに赤いリンゴ。
シャーロット　デンマークは寒いからでしょ。
ジューン　リンゴは寒すぎる土地では採れないのよ。イギリスやドイツ、長野や青森はリンゴで有名だけど、北海道やデンマークにはリンゴ娘はいないでしょう。
このあたりでは、リンゴだって珍しいはずなのよ。
シャーロット　へーえ。詳しいのね。
ジューン　このあいだ、ネットで読んだのよ。
シャーロット　ふーん。
ジューン　これ、もしかするととても貴重なもので、女王様の…、いや、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様の好物なのかもしれないわ。
シャーロット　じゃあ、このリンゴを、その、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様に届ければ「私の大切なリンゴを届けてくれたのは、そなたたちか？　ではなんなりと、ほうびを…」なんてことに…。
マッチ　「私の大切なリンゴを持っていったのは、お前たちか。天罰じゃ！」
シャーロット・ジューン　いやーっ！
ハイの人　はい！　〔やめなさい！〕
マッチ　師匠、すみません。
シャーロット　でも、このリンゴ、パサパサしていそうよ。
ハイの人　はいー。　〔香りもあまりないし〕
ジューン　じゃ、ただの売れ残りかしら。
マッチ　はっはっは。売れ残りか。
シャーロット・ジューン　違うわよ！
マッチ　え？、何のこと？
ジューン　リンゴよ、リンゴ。（シャーロットに）ねえ、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの…

「～は誰？」の瞬間、稲妻が落ち、女王の姿が見える。

4　人　キャーッ！
ジューン　（驚いて）ねえ、見えた？！
ハイの人　（驚いて）はい！
シャーロット　（驚いて）しかし、リアルに！　〔おぼろげに〕
マッチ　あれが、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様だ！
ジューン　あー、怖かった。
シャーロット　でも、どうして急に現れたんだろう…。

ジューン　このリンゴのせい？　（シャーロットに）帰ろうか…。
シャーロット　うん…。そうね。
マッチ　君たちは帰れないってば。
ジューン　じゃあ、どうすればいいのよ！
ハイの人　はい。〔ねえ〕
シャーロット　え？
ハイの人　はーい。〔もう一度見たいわ〕
シャーロット　もう一度？
マッチ　やめましょうよ、師匠。
ハイの人　はいー。はい。〔見たいの。ねえ〕
シャーロット　どうする、ジューン？
ジューン　うーん。見たい気もするけど。
ハイの人　はい。〔やりましょう〕
ジューン　えーと。（リンゴに向かって）この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様っ！

やや間。何も起こらない。

シャーロット　…出てこないわね。
ハイの人　はい？〔へんねえ〕
ジューン　もっと前の言葉かしら。
シャーロット　（リンゴに）リンゴ娘！
マッチ　（リンゴに）売れ残り！
シャーロット・ジューン　違うわよ！
マッチ　え？
ハイの人　はい。はあい。〔しかたない。行こう〕
ジューン　行くの？　どうする、シャーロット？
シャーロット　しかたない。行くしかないもの。
ハイの人　はあい。〔大丈夫、行こう〕
シャーロット　あんたに言われると、大丈夫、って気になるわ。
ハイの人　（マッチの精に）はい？〔どっちなの？〕
マッチ　本当に行くんですか？　…わかりました。えーと…、こっち。
ハイの人　はあい。

ハイの人、マッチの精、退場。
シャーロット、ジューン、顔を見合わせ、覚悟を決めて後を追う。

6・ジューンとシャーロットとマッチ売りの少女の第三場

女王の城。

その1

侍女、バタバタと登場。リンゴを探している。
女王が現れる。

女王　リンゴよ、リンゴ。この世で一番美しいのは誰？　……。リンゴよ、リンゴ。この世で一番美しいのは誰？　返事がない。この城に誰か人間がまぎれこんでいるわ。（侍女に）何をしているのです、あわただしい。

侍女　はっ。い、いえ…、あの、リンゴが…。

女王　私のイングリッドの身に何か？

侍女　い、いえ…、あの、リンゴが…。

女王　あのマッチ売りの小娘が、私のイングリッドを？

侍女　いえ、あの…。イングリッドって、リンゴのことですか？

女王　あたりまえです。

侍女　それなら大丈夫です。イングリッドさんはあの少女の手には渡っていません。

女王　では、どこにいったのです、私のピノバは？

侍女　ピノバ？

女王　（当然のように）私のリンゴの名前です。

侍女　あ、はい。ピノバさんは、どうも人間の手に…。

女王　すぐに取り返しなさい。私のガーラの身に何かあったら、どうするつもりです。

侍女　誰ですか、それ？

女王　（当然のように）私のリンゴの名前です。

侍女　1個のリンゴに、そんなに名前があるんですか？

女王　ホホホ。美しいものはいくつもの名前を持っているものです。たとえば、美しい女はおねえさんのほかに、母親になればおかあさん、近所の子どもにはおばちゃん。しのぶ、なぎさ、ヨーコとその土地によって使い分けているものなのです。

侍女　はあ…。リンゴは美しいですか？

女王　ホホホホホ。リンゴは美しい、禁断の果実と呼ばれるほどに。けれどリンゴは恐ろしい、えも言われぬほどの力を秘めている。アダムとイブはリンゴをかじって知恵を身につけ、ウィリアム・テルはリンゴを射抜いて勇気を手に入れた、ニュートンはリンゴの落ちるのを見て万有引力を発見し、相対性理論をとなえたアインシュタインも、リンゴが好きだった。こうして、リンゴは世の中を変えてきたのです。

侍女　なるほど。では、私にも名前を一つ。
女王　あなたたちには「妖精」という名前があるでしょう。
侍女　せめてもう一つ。
女王　ピーターパンに出てくる妖精は、ティンカーベルという名前をもらいながら、何の役にも立たないどころか、かえって迷惑をかけていたではないか。役に立たないものに、名前は必要ない。
侍女　…わかりました。では私は、リンゴを探しに行ってきます。

侍女、走り去る。

女王　エル、早く帰っておいで。ホホホホホ。

女王、消える。

その2

言葉のゆがむ部屋。
ハイの人、現れる。道に迷っている。走り去る。
マッチの精、追うようにして登場。

マッチ　かんぴょう！かんぴょう！　トロ、イクラ、アナゴー！
ハイの人　〔師匠！師匠！　どこ行ったんですかー！〕
マッチ　（声だけ）はいー。　〔こっちよ〕
かんぴょう！　〔師匠！〕

マッチの精、走り去る。
シャーロット、ジューン、追って登場。

シャーロット　あれ？　今、ここを曲がったのに見失ったわ。
ジューン　？（けげんな顔で見る）　…どこにいったのかしら。
シャーロット　？（けげんな顔で見る）　…まるで迷路ね。
ジューン　…ザルでヘイホーヘ？　なに？　ザルでヘイホー、って？
シャーロット　…伊豆のペンションで？　ジューン、あなたの言うことがわからない。
ジューン　…辛さの汁だけサンマーメン？　それなに？
シャーロット　へんだわ、何かがへん。
ジューン　あっ。（指をさす）

少女が、こっそりと登場。

少　女　あっ！？（気づいて逃げようとする）
ジューン　待って！　マッチ売りの少女？
少　女　私は、バクチ打ちの頭領じゃないわ。
シャーロット　（傍白）わかったわ。この場所にはおかしな磁場があって、言葉がゆがんで伝わるんだわ。
ジューン　あなたはマッチ売りの少女なの？
少　女　？
ジューン　あなたは！
少　女　ガンモドキ？
ジューン　あなたは！！
少　女　ハタハタ？
シャーロット　（指さして）あんただよ。
少　女　私？（と動作で）

シャーロット、ジューン、喜ぶ。

ジューン　マッチ売りの！
少　女　（怒って）バクチ打ちじゃないってば。
ジューン　マッチ売りの！　少女なの？！（全身の力をこめて）

ジューンの脇で、シャーロットがつい身振りで表現している。
少女はそれを見て、理解し、うなづく。

ジューン　なんとか通じたみたい。
シャーロット　ふーっ。この方法は消耗するわりに効果がうすいわね。
ジューン　そうだ。

ジューン、思いついて、紙に書いて少女に見せる。

ジューン　見て！
少　女　私は字が読めないの！
ジューン　砂漠は木がはえないの？　なに言ってるのよ！
少　女　ワニ食ってる土曜？　それがどうしたって！
ジューン　米屋もうけたっけ？　何の話よ、このトンマ！
少　女　なによ！
ジューン　やさしくしてれば、いい気になって。表へ出ろ、表へ！
少　女　望むところよ！

ジューン、少女、出ていく。

シャーロット　（うろたえて）ちょっと、２人とも！

ハイの人、マッチの精、戻ってくる。

ハイの人　はい！　〔見つけた！〕
シャーロット　よかった。
マッチ　どうしたんだ？
シャーロット　え？（けげんな顔）
マッチ　あ、そうか。ココア、モカジャバ、うまいんだ。
シャーロット　そう。ここは言葉がゆがむんだ。だから喧嘩になったのね。あのね、ジューンが、バクチ打ちの頭領と手を切ったのよ。
マッチ　マッチ売りの少女と出ていったんだね。（ハイの人に）かんぴょう。
ハイの人　はあい。　〔なに〕
マッチ　タバコ吸いたくなると。
シャーロット　早く追いかけないと。
マッチ　バッタン、目が回ってしまうよ。
シャーロット　また見失ってしまうよ。って、そうね、行きましょう。
ハイの人　はい。　〔ええ〕

３人、後を追って走り去る。

その３

別の部屋。
少女、ジューン登場。それぞれ身構える。

少　女　どこからでも、かかってらっしゃい。

３人登場、とびこんでくる。

ハイの人　はいー！
シャーロット　喧嘩をするのは待って！
マッチ　でっかいスルメは焼いてー！

少女、マッチの精をポカリ。

少　女　何、わけのわからないこと言ってるんだよ。
シャーロット　ここは言葉がゆがんでいないようね。

少　女　（マッチの精に）あー、あんたぁ！
マッチ　あー。（ごまかすように）はーい。
少　女　さっきは途中でいなくなるし。
マッチ　この人たちに呼ばれてたんだよ。しかも、今は修行中だし。
少　女　おかげでずいぶん歩き回ったわよ。
マッチ　私のおかげじゃないと思うが。
少　女　あんたのせいよ。
マッチ　私のせい？、妖精だから“せい”の字がついているんだよ、なんてね。
少　女　難しいこと言ってもわかんないわよ！
マッチ　わーっ！

少女、マッチの精を追い回す。

ハイの人　はいー。　〔やめなさいよ〕

マッチの精、少女、ハイの人退場。
シャーロット、ジューン、追おうとするが、行く手を侍女が妨げる。

侍　女　お待ちなさい！　私どものお城へようこそ。
シャーロット・ジューン　え？　あ、ど、どうも・・・。
侍　女　せっかくおいでいただいたのに、ご挨拶がないのはあまりにも礼儀知らずではありませんか？
ジューン　すみません。
シャーロット　あなたは、このお城の方ですか。
侍　女　はい。
ジューン　ではあなたが、あの、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様・・・ですか？
侍　女　いいえ。私は、このお城に住む妖精です。
シャーロット　妖精ってことは、“トゥルトゥトゥトゥトゥトゥ、タラトゥララー（妖精の真似をする）”なんてこともするんですか？
侍　女　いいえ、私は“トゥルトゥトゥトゥトゥトゥ、タラトゥララー（グレードアップして妖精の真似をする）”なんてことはいたしません。このお城でそんなおとなげない真似をすると、たいへんなことになりますよ、あなた。
シャーロット　す、すみません。
ジューン　申し遅れました。私たち、うっかりこのお城に迷いこんでしまったのです。どうぞお許しを。
侍　女　そうでしたか。普通はお詫びにと、手土産の一つもお持ちになるものですのに。たとえば、果物とか。
ジューン　あいにく何も・・・。

侍　女　　リンゴとか。
シャーロット・ジューン　あいにく何も・・・。
侍　女　　リンゴ、とか。
シャーロット・ジューン　あいにく何も。
侍　女　　そう・・・。（少し考えて）実は、このお城の女王様はとても恐ろしいお方なの。
ジューン　　お話はうかがってます、礼儀に厳しい方だと。
侍　女　　そればかりか、とてもわがままなの。
シャーロット　しかもスパルタ教育だと。
侍　女　　ですからお二人には、今のうちに、ここのしきたりを覚えていただかなくてはなりませんね。
ジューン　　礼儀をわきまえないと・・・
シャーロット　ボコンボコンにされちゃうかもしれないからですね。
侍　女　　そうよ。

侍女、２人を腰掛けさせ、分厚い本を渡す。

侍　女　　これがマニュアルよ。
シャーロット　これ、ハローページって書いてありますけど。
侍　女　　（吹き矢を吹く）しゅっ。
シャーロット　ぶすっ。

シャーロットに当たるが、命に別状はない。

侍　女　　では、読みましょう。一つ、ひなたに一人きり。
シャーロット・ジューン　（読む）一つ、ひなたに一人きり。
侍　女　　二つ、ふるさと振り切って。
シャーロット・ジューン　（読む）二つ、ふるさと振り切って。
侍　女　　三つ、みごとなミドリガメ。
シャーロット・ジューン　（読む）三つ、みごとなミドリガメ。
シャーロット　これ、何かの役に立つんですか？
侍　女　　（吹き矢を吹く）しゅっ。
シャーロット　ぶすっ。

シャーロットに当たるが、命に別状はない。

侍　女　　余計なことを考えているから、そういう疑問が出るのです。いいですか、これはしきたりなのですから、心を真っ直ぐにして何も考えず、ただ覚えなくてはいけません。邪念を捨てて覚えなくては。

シャーロット・ジューン　はい。

ジューンは声を出し、シャーロットは無言で読み始める。数え歌のようで無意味なものがよい。始めは普通のスピードだが、突然急に速度が遅くなり、やがては凍りつくように止まってしまう。

侍女　ホッホッホ。ここはね、気持ちのない言葉を喋っていると、だんだん凍りついてしまう部屋なのよ。でも大丈夫、凍りついてしまうのは、子どもの魂だけ。身体の方はそのうち動けるようになるわ。その時あなたは、一人前の大人よ。さてと、リンゴはっと・・・。（探す）ない、本当にないわ・・・。このままでは、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様に、また怒られてしまう。（うろたえる）どうしよう。（人の気配に気づく）あら？

侍女隠れる。少女が現れる。

少女　まったくもう、逃げ足だけは早いんだから。
侍女　ようし、変身！（現れる）こんにちわー。
少女　あっ、貴様ぁ！（身構える）
侍女　ま、初めて会ったのに物騒なご挨拶。
少女　初めてじゃないでしょ！　さっきはよくも・・・。
侍女　待って。それはたぶん、また、私の姉のしわざね。
少女　なんですって？
侍女　何があったか知らないけど、それは私じゃないわ。ほら、よく見てちょうだい。いつも間違えられるのよ。でもさっきあなたに会ったのは、私じゃないでしょう。
少女　うーん、よく似ているけど・・・。
侍女　似ているけど？
少女　違う気もするけど・・・。
侍女　ほら。姉は右利きだけど、私は左利きじゃないの。
少女　ふんふん。
侍女　姉はわりと器量良しだけど、私はそれほど不細工じゃないし。
少女　ふんふん。
侍女　姉はわりと背の高い方だけど、私はこ～んなことができるのよ。（と全然関係ない特技を見せる）
少女　すげー。なるほど、言われてみれば全然ちがうね。
侍女　でしょう。私はあなたの味方よ。では本題に入るわね。リンゴを見せて。
少女　え？
侍女　リンゴを見せてよ。
少女　リンゴはあんたのお姉さんが持っているわ。

侍女　え？（少し考える）じゃあ、あなたは持っていないの？　リンゴのことはあきらめたのね。
少女　あきらめないわよ。
侍女　どうして？
少女　欲しいんだもの。
侍女　そう・・・（少し考える）いい方法があるわ、リンゴを手に入れる呪文があるのよ。知りたい？
少女　うん。
侍女　一生懸命まじめに唱えないと効果がないわよ。大丈夫？
少女　うん。
侍女　じゃ、あとについて唱えてね。「リンゴころころ三ころころ、合わせてころころ六ころころ」
少女　「リンゴころころ三ころころ、合わせてころころ六ころころ」
侍女　何度も繰り返して。
少女　「リンゴころころ三ころころ、合わせてころころ六ころころ、リンゴころころ三ころころ、合わせてころころ六ころころ、・・・。

少女、必死になって唱えているが、やがて凍りつく。

侍女　ホッホッホ。変身！　お姉さんがいるなんて、うそだよン。どれどれ。（探す）あら、本当にないわ・・・。（うろたえる）どうしよう。

マッチの精、ハイの人、背後を気にしながら登場。
マッチの精、ふっと顔を上げると少女に気づく。

マッチ　わーっ、ごめんなさい！（動かないことに気づいて）あれ？
ハイの人　はい？　［あれ？］
侍女　あら、妖精。
マッチ　あ、妖精。
侍女　あんた、こんなところで何しているのよ。
マッチ　うん、私もよくわからないんだ。あ、この人は私の師匠だ。
侍女　（そっと）それより、あんた、イングリッド見なかった？
マッチ　知らない。
侍女　ピノバは？
マッチ　ううん。
侍女　ガーラ？
マッチ　いいや。
侍女　エル？
マッチ　まったく。

侍　女　フジ？
マッチ　ちーとも。
侍　女　なら、いいわ。女王様のリンゴはどこに行ったのかしら。

侍女退場。

マッチ　え、リンゴ？　リンゴならここにあるよ。おーい。
ハイの人　（マッチの精に）はーい！　〔みんなの様子が変〕
マッチ　どうしました、師匠？　あ、凍り始めてますね、こいつは。だめだ、手遅れですよ。この氷の呪文は解けないんだ。
ハイの人　はい！　〔何とかしてよ！〕
マッチ　無理ですよ。魂から凍り始めてるんだから、声なんか聞こえませんよ。
ハイの人　はい？　〔妖精を呼べば？〕
マッチ　妖精は呼んでも現れるだけなの。
ハイの人　はい？　〔ドリーミィマッチは？〕
マッチ　ドリーミィマッチね、いい案かもしれませんね。えーと。（少女のマッチを取ろうとする）だめです。手で押さえていて、全然取れません。
ハイの人　はいー。　〔どうすればいいの〕
マッチ　いやー。主人公が凍ったままじゃ、この先どうなるんでしょうね。

やや間。
シャーロット、突然目覚める。

シャーロット　あーよく寝た。・・・どうしたのよ？
ハイの人　はいー？！　〔どうして？〕
マッチ　どうやって蘇ったんだ？
シャーロット　どうやって？　さっきへんな女に、これ読めって渡されたんだけど、私、アレルギー体質でしょう。文字が多くてつい眠っちゃったのよ。
マッチ　じゃ、眠っていたの？
シャーロット　そうよお。ほら、みんな寝ているじゃない。
ハイの人　はーい。　〔違うのよ〕
マッチ　みんなは子どもの魂が凍り始めているんだ。
シャーロット　子どもの魂が凍る？
マッチ　一人前の大人になるってこと。べつにたいしたことじゃないんだ。妖精に会えなくなったり、ドリーミィマッチが使えなくなるくらいの違いなんだけど。
シャーロット　ふーん。まあ、どっちにしても、このままあの女の手に引っかかるんじゃ悔しいわね。で、ジューンの魂が凍らないようにするにはどうすればいいの？
マッチ　わからない。
シャーロット　肝心なことになると、いつもわからないのね。

マッチ　肝心なことになると、すぐ人を頼るんだから。
ハイの人　はいー。　〔それどころじゃないでしょ〕
シャーロット　そうね、えーと…。そうだ、邪念が入ると効き目がないんだから、邪念を与えればいいのよ。
ハイの人　はい。　〔なるほど〕
マッチ　ということは…
シャーロット・マッチ　（ジューンの耳元で）男、男、男、男、男…、海には男の！
ジューン　（徐々に氷が溶けて）バカヤロー！　…あれ？私どうしていたのかしら。
シャーロット　ジューン、あなたは凍りかけていたのよ。
ジューン　え？
マッチ　よかったなあ、邪念だらけの女で。
ジューン　違うわよ！
ハイの人　はい！　〔もう一人いるのよ〕
シャーロット　あ、そうね。
マッチ　（少女の耳元で）男、男、男…。反応がないな。
ジューン　子どもだからでしょ。
シャーロット　そう言えば、夢うつつで聞いたわ。この子はリンゴを欲しがっていた。
ハイの人　（リンゴを出して）はい？　〔これ？〕
シャーロット　これかしら。
マッチ　（リンゴを少女の前に持って行き）うりゃうりゃ。
少　女　…うーん。
ジューン　溶け始めたみたい。
少　女　（徐々に氷が溶けて）リンゴの香り…あっ、私のリンゴ。
3人（＋ハイの人）　バンザーイ！
少　女　（マッチの精に）また、あんた？　私のリンゴをどうしようっていうのよ。
マッチ　え？　わーっ！

マッチの精、逃げる。退場。

少　女　待てーっ！
ハイの人　はーい！　〔いい加減にしてよ！〕

少女、ハイの人、追って退場。

ジューン　きりがないわね。
シャーロット　うん…。私たち、ここから出られるのかしら。

2人、追って退場。

7・全員の第四場

侍女、うろたえながら登場。
妖精、能天気に登場。通り過ぎてゆく。

侍女　（見とがめて）あら！妖精！
妖精　え？　おや、妖精じゃないか。
侍女　のんきにしてる場合じゃないわ。あの下品な人間たちを連れてきたのはあんたでしょ。
妖精　マッチ売りの少女のこと？
侍女　違うわよ。敬語を知らない３人組よ。
妖精　あの３人組が来てるの？　私じゃないよ。
侍女　本当？
妖精　だって私は、あの３人組をまいてから、このお城に来たんだから。
侍女　本当？
妖精　いや、このお城に来てからまいたんだっけな、どっちだったかな。
侍女　それじゃ連れてきたんじゃない。
妖精　そうか。
侍女　そのうちの誰かが、女王様のリンゴを持って行ったらしくて、もう女王様はたいへんなお怒りなの。
妖精　えー。
侍女　あんたのせいよ。
妖精　よし、逃げよう。
侍女　こらっ。リンゴを探すのを手伝ってよ。
妖精　おや？　人間たちの気配がするぞ。
侍女　え？　本当だ。でも２人は凍りかかっているはずなんだけど。
妖精　とにかくこの部屋でくいとめて、リンゴを取り返そう、女王様に見つからないうちに。
侍女　そうね。じゃ、私は隠れるから。
妖精　いや、私が隠れるから。
侍女　でも、私は顔を知られているから。
妖精　私だって知られているよ。
侍女　あんたは人間たちと仲がいいでしょ。
妖精　リンゴを失くしたのはあんただろ。
侍女　とにかく私が。
妖精　いや、私が。
侍女　私が。
妖精　私が。

マッチの精、とびこんでくる。

マッチ　（２人に気づき）あっ、妖精！
侍女・妖精　あ、妖精！
妖　精　これ、ややこしくないか？
マッチ　（追っ手に気づいて）いけね。

マッチの精、２人の後ろに隠れる。
少女、ハイの人、シャーロット、ジューン、とびこんでくる。
誰がリンゴを持っているかわからない。

ハイの人　はいー！　〔あーっ！〕
少　女　また、あんたたち！
侍女・妖精　（顔を見合わせ）しかたがない。

侍女、妖精、マッチの精、三方に分かれる。

侍　女　私どものお城にようこそ。
シャーロット　それはさっき聞いた。
侍　女　ならば率直に。リンゴを返してちょうだい。
ジューン　リンゴ？
少　女　ないわよ。
妖　精　あれは女王様の大切なものなんだ。人が「知恵」を知り「勇気」を身につけ「万物の法則」を発見した時、それを見守っていた。世の中を支配する力を秘めている。
侍　女　もちろん、そんなことは秘密だけどね。
マッチ　誰にも言っちゃだめだぞ。
シャーロット　あきれた。
ハイの人　はい。　〔そうね〕
侍　女　誰がリンゴを持っているの？
妖　精　少し本気で怒っちゃうぞ。
少　女　知らないわ。
侍女・妖精・マッチ　あいうえおで笑う！（シャーロットに）あ。
妖　精　あっははは。（ジューンに）い。
シャーロット　いひひひひひ。（少女に）う。
ジューン　うふ、うふふふふ。（ハイの人に）え。
少　女　はい！
ハイの人　〔何よ〕

侍　女　あなたが持っているのね。
マッチ　師匠！私が身代わりになります！（ハイの人の前に立ちはだかって）えへっ。
（侍女に）お。
侍　女　おほほほほ。（妖精に）か。
妖　精　か？！　カッカッカッ。（シャーロットに合図）
シャーロット　キヒヒヒヒ。（ジューンに合図）
ジューン　クックック。（少女に合図）
少　女　ケケケケケ。（マッチの精に合図）
マッチ　コ・・・。コッコッコ、コケーッコ！
全　員　（マッチの精に）お前だ！
マッチ　（リンゴを取り出して）あ、私が持っていた・・・
侍女・妖精・マッチ　わーい、リンゴを取り戻した。（騒ぐ）
ジューン　でも、この人は私たちの味方よ。
侍女・妖精　わーい、一難去ってまた一難。（静かに騒ぐ）

女王が姿を現す。
この機に紛れて、リンゴは少女の手に渡る。

女　王　えーい、騒がしい！　何ごとです。
侍女・妖精　あ、この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様だ！　頭（ず）が高い！

全員、ひざまづく。

女　王　人間のにおいがします。なぜこの城に来たのです？
ジューン　それは・・・。
女　王　おおかたよからぬことでも考えたのであろう。そうでなければ、お前たちのような言葉づかいの悪い者が、この城に入れるはずがない。
ジューン　申し訳ありません。私たち、迷い込んでしまったんです。すぐに失礼いたしますので、お許しください。
女　王　ホーホホホ、非常識な。お帰りになるチャンスはいくらでもあったのに。まっすぐな素直な心さえ持っていれば。
シャーロット　でも、先ほどはそれで魂が凍らされそうになりました。
女　王　・・・！？　子どもの魂が凍らされるのは嫌いですか？　この城は魑魅魍魎（ちみもうりょう）のはびこる北の国と、秩序正しい西の文明との架け橋。魂のおもむくままに自由にふるまう者を文明の世界に送り出すわけにはまいりません。素直な心と常識をわきまえていただきたいのです。・・・ではこうしましょう、マニュアルを読んでいただきましょう。
侍　女　その手は使いました。

女　王　…では、呪文を唱えて…
侍　女　それも使いました。
女　王　…では…
ハイの人　はい！　〔いいかげんにしてよ！〕
女　王　何者ですか、この者は！
ハイの人　はい！　〔口先だけじゃないの！〕
女　王　言葉も知らないのですか！
マッチ　この方は私の師匠です。
ハイの人　はい！はい！はい！　〔どこが悪いのよ！〕
女　王　何を言っているのかわからない。この礼儀知らずめ！
ジューン　ハイさん、やめてよ。
シャーロット　（女王に）あんたの言うこともよくわかんないわよ。
ハイの人　はい！はい！
女　王　えーい！（手を大きく上げる）
侍女・妖精　グイン！
シャーロット・ジューン　ガシャン！

シャーロット、ジューン、ハイの人、カプセルに閉じ込められる。

マッチ　師匠！
女　王　ホホホホホ。さあ、子ども、あなたはこの城から出してあげてもいいのよ。
そのリンゴさえ返せば。
少　女　取引ってわけね。…私だけじゃ嫌、あとの夢見が悪いもの。ここにいる、
みんなも一緒に助けてくれなきゃ。
女　王　いいでしょう。どうせこのお城にはふさわしくない人間たちですもの。
少　女　もう一つ。先のこのお城から出して。リンゴはあとから返すわ。
女　王　それはできない。リンゴを先に。
少　女　いいえ、お城を出るのが先。
女　王　人間は嘘をつきますからね。あなたの言うことは信用できない。
少　女　おばさんだって私をだましたじゃない。
女　王　おばさんではない。
少　女　忘れないでね、私はここにドリーミィマッチを持っているのよ。
女　王　（多少ひきつりながら）ホホ、ホホホ、ホホホホ。けれどその中のどれがド
リーミィマッチなのか、あなたにもわからないのでしょう。
少　女　そ、そんなことないわよ。
女　王　もしかすると、ドリーミィマッチなどもう、一本もないかもしれない。
少　女　と、とにかくお城から出して。
女　王　リンゴを先に。
少　女　だめ。出るのが先よ。

女王　ホホホ、水かけ論ね。ドリーミィマッチのことは見逃すと言っているのに。
少女　え？

マッチの精、あわてて退場。すぐにたらいを持って登場。少女に水をかける。

マッチ　バシャッ！
少女　キャア！
女王　何ですか、やかましい。
マッチ　水かけろ！と言われたものですから。
女王　水かけ論と申したのです。
マッチ　あ、すみません。（片づける）
少女　あーっ、マッチがびしょぬれ！　使いものにならないわ。
女王　ほおー、ホホホホ。その手があったか。妖精、お手柄ね。
侍女　え？　私ですか？　わーい、ほめられた。（騒ぐ）
妖精　え？　私ですか？　わーい、ほめられた。（騒ぐ）
女王　違います。騒ぐな！（マッチの精に）お前のことだよ、妖精。
侍女　あーあ、怒られた。（がっかりして脱力感に襲われる）
妖精　あーあ、怒られた。（がっかりして脱力感に襲われる）
マッチ　え？　わーい。ではごほうびに師匠を助けてください。
女王　それはできません。甘えるな！
マッチ　え！？　あーあ、妖精は無力だ。（がっかりして脱力感に襲われる）
少女　（気がついて）ちょっとあんたたち、しっかりしてよ。

見れば3人とも力を失いかけている。

少女　しかたない。ここはもうお願いするしかないわね。（客席に）みなさんにお願いがあります。妖精といえば、みなさんの愛が力です。みなさんで妖精を元気づけてください。ぜひ「妖精！」と声をかけてください。お願いします。3人分ですからね、大きな声で、せーの！「妖精！」　恥ずかしい気持ちはわかります。心の中で別のことを考えている人はいませんか？そろそろ終わりかなと思っている人もいますよね。でも、このシーンを越えないと、ラストシーンはありません。みなさんにかかっています。せーの！「妖精！」とてもいいです。でももう少し、一体感が欲しいですね。（シャーロット、ジューン、ハイの人）あなたたちも他人事（ひとごと）じゃないのよ。

女王はいつの間にか姿を消している。
うながされて、シャーロット、ジューン、ハイの人も客席に降りる。

少女　それじゃあ、もう一度。みなさん一緒に。せーの！「妖精！」　さあ、妖精たちは元気になるかな。

侍女、妖精、マッチの精は、元気をもらい復活する。
それを見て、シャーロット、ジューン、ハイの人は舞台に戻る。

全員　みなさん、どうもありがとう！
少女　あ、女王がいない。
全員　女王、出てこーい！
少女　（客席に）もう一度だけ、協力してください。女王を呼び出しましょう。今度は「女王、出てこーい！」です。せーの！
全員　「女王、出てこーい！」

女王、現れる。

女王　えーい、女王ではない。この世で一番美しいのは誰？それはあなた様ですの女王様です。だいたい子ども、あなたは今、誰と話をしていたのですか。
少女　お客様よ。
女王　こら、子ども。この世界にはお客様などいないのです。
少女　いるわよ、ほら。見えないの？　ほらほら。
女王　しかも、人間たち、お前たちは閉じ込められていたはずではないか。
シャーロット・ジューン（+ハイの人）　（カプセルがないことに気づいて）本当だ・・・。

マッチの精、ハイの人に駆け寄る。

少女　お客様のおかげよ。私の観た子ども劇場は、たいていお客様に助けてもらって、話が進むのよ。
女王　子ども、この世界は子ども劇場ではない。
少女　子ども子どもって言わないでよね、おばさん。私はマッチ売りの少女なのよ。
女王　ホホホホホ。あなたのマッチはもう使いものにならないのでしょう。ならば、マッチ売りではなく、ただの少女ではありませんか。ホホホ。
少女　いいえ。私はマッチを売らないマッチ売りの少女になるの。マッチ売りのお姉さんになって、マッチ売りのおばさんになって、マッチ売りのおばあさんになるまで、私は夢を届けるマッチ売りになるわ。
女王　子ども、何を言い出したのかわからない。
少女　つまり、こういうことよ。（マッチを一本取り出す）
女王　それはマッチでは？！
シャーロット　それ、ドリーミィマッチ？
ジューン　それが最後の一本ね。

女　王　よくもそんなものを隠していましたね。
少　女　女の子なら誰でも、したたかな秘密を一つや二つ持っているものよ。
女　王　小娘！
妖　精　おい、マッチ売りの少女がやけにカッコよくなってきたぞ。
マッチ　やけくそになっているからじゃないのか。
侍　女　いいえ、図に乗りやすいタイプだからよ。
少　女　（シャーロットとジューンに）この一本はあなたたちのために擦ってあげるわ。
女　王　お待ち！
シャーロット・ジューン　あーっ！
少　女　えい！

少女、マッチを擦る。
世界が一瞬変わったような気がする。気のせいにしては印象的に。
なお、マッチを擦るシーンは、裸火を使用せず、演劇的かつ効果的に処理してもらいたい。

女　王　うわ～あ！（倒れる）
侍女・妖精　うわ～あ！（と倒れかかって）あれ？（平気である）
少　女　あんたたち、願い事を唱えなきゃダメじゃない！　願い事を叶えるのは自分たちの力なのに。
シャーロット　でも、今の最後の一本でしょ。
少　女　だったら何なのよ。
シャーロット　願い事はいっぱいあるもの。
少　女　バッカじゃない。
妖　精　おい、全然なんともないぞ。
侍　女　でも女王様はあんなに怖がっていたわ。今もほら、女王様の姿が見えない。
全　員　本当だ。
少　女　じゃ、今のうちにリンゴをもらって逃げちゃおう。（走りかける）
ジューン　そうね。
少　女　やめてよ。
ジューン　え？
少　女　ついてこないでよ。自分たちのことは、自分たちで何とかしなさいよ。
シャーロット　でも・・・。
少　女　本当のことを教えてあげる。ドリーミィマッチなんて、何の役にも立たなかったのよ。

女王、起き上がる。

女　王　ホホホホホ。そのとおりですよ。
ハイの人　はーい！　〔あっ〕
女　王　ドリーミィマッチは夢を見せるだけ。叶えてはくれなかったのですから。
シャーロット　だけどあなたは、ドリーミィマッチを怖がっていたじゃない。
女　王　私が？　ホホホホホ。私はこの城の女王ですよ。恐れるものなど何もありません、ホホホホホ。
少　女　もう一本あるのよ、ドリーミィマッチ。
女　王　なに・・・（青ざめる）
ジューン　わかったわ。なぜ怖いのか。あなたはマッチが怖いのね。マッチを擦る。うまくいくこともあれば失敗することもある。火がつく。手を伸ばせば熱い。フッと消えてしまったり、そうかと思えばまた燃え始めたり。いつも気まぐれな、そんなマッチの炎が、あなたには恐ろしいんだわ。
女　王　む・・・。
シャーロット　それは女の勘ね。
ジューン　（意味ありげに微笑んで見せる）
女　王　妖精、水をおかけ！
侍女・妖精・マッチ　は、はい！
ハイの人　はい！　〔ダメ！〕
マッチ　（ハイの人に駆け寄り）師匠！

女王、ハイの人の声に不快そうに耳を押さえる。
侍女、妖精ははっとして戻ってくる。

少　女　（ジューンに）あげる。これが最後のチャンスよ。
ジューン　（受け取って）でも、どうして？
少　女　私にはこのリンゴがあるもの。
女　王　子ども、なぜそんなにリンゴを欲しがるのです？
少　女　リンゴが好きなの。
女　王　それはきちんとした理由とは言えません。
少　女　だって、好きなんだもの！
女　王　ホホホホホ。リンゴは美しく、リンゴは恐ろしい。人はリンゴとともに歴史を歩んできたのです。このリンゴは世の中を支配する宇宙です。
少　女　それはきっと、理屈っぽくておいしくないリンゴのことだわ。（リンゴを見て）リンゴがかわいそう。いつもいつもピカピカに磨かれて、外側はきれいなまま、中はいつの間にかしなびてしまうの。でも、このリンゴはまだ大丈夫。おいしそうな甘い香りが微かにしているもの。毎日毎日「あなたが一番美しい」なんて言い続けなきゃならない、不幸なリンゴを助けてあげる。
侍　女　リンゴの花言葉は、誘惑。
妖　精　マッチ売りの少女が、誘惑の香りに誘われた。。

マッチ　子どもの心はいつも気まぐれ。
女　王　おやめ！　私のリンゴを！　私の宇宙を！

少女、高いところに駆け上り、リンゴをかじる。
世界が大きく輝く。

女　王　えーい。（苦しむ）
ジューン　何が起こったの？
ハイの人　はーい。
マッチ　（ジューンに）マッチを擦るんだ！
侍　女　誘惑のリンゴがかじられて、
妖　精　こぼれだした甘い蜜が新しい夢を見せてくれる。
マッチ　ドリーミィマッチに願いを込めて。
シャーロット　わかったわ。・・・イブが「知恵」を知りたいと願った時、
ジューン　ウィリアム・テルが「勇気」を身につけたいと願った時、
シャーロット　ニュートンが、
ジューン　アインシュタインが、
シャーロット・ジューン　「万物の法則」を知りたいと願った時、
侍　女　その時リンゴがかじられ、
マッチ　マッチの炎がその宇宙を照らし、
妖　精　希望の光がその夢を叶えてくれた。
ジューン　けれど、一つ一つはとても小さな夢。
シャーロット　けれど、それはとても大切な夢。（ジューンに）さあ。
ジューン　（手が震えている）私、失敗するかもしれない・・・。
シャーロット　大丈夫。
ジューン　でも・・・。
シャーロット　その時はその時よ。そうやってきたんじゃない。
ジューン　・・・うん。
シャーロット・ジューン　この城から出して！　私たちの世界に帰りたい！

ジューン、マッチを擦る。世界が明るく輝く。
シャーロット、ジューン、ハイの人、ひかりの中へ消えてゆく。

女　王　ホホホホホ。夢も希望もなくしたら、またいらっしゃい。もっともあなたがたは、いつもこのお城への一本道を歩き続けているのですから。ホホホホホ。

女王、崩れ落ちる。
つるべ落としのような暗転。

8 ・エピローグ

人魚姫の像のある海辺の公園。
ハイの人、ジューン、シャーロット登場。だいぶ落ち着いている。

ハイの人　はーい。
ジューン　うん、そうね。
ハイの人　はーい。
ジューン　うん。
シャーロット　うんうん。ジューン、本当にわかってるの？
ジューン　わかってない。けど、終わってみれば楽しかったね、って意味かなって。
シャーロット　当たり。…だと思う。（ハイの人に）ね。
ハイの人　はい？
ジューン　（包みを出して）ハイさん、これが通訳料の焼きトウモロコシよ。
シャーロット　いろいろお世話になったから、２本のところを３本にしてあるわ。
ハイの人　はいー！
シャーロット　また会いましょうね。
ジューン　そうね、ぜひまた。
ハイの人　はい。
シャーロット　それじゃ、ハーイ。
ハイの人　はーい。
ジューン　ハーイ。

〔でもよかった〕
〔結構楽しかったわ〕
〔わーい！〕
〔さよなら〕

ハイの人、退場。

シャーロット　そうだ、人魚姫の像にもお礼しなきゃ。（真似をして）うっふん。
ジューン　その「うっふん」は必要？
シャーロット　さ、おさいせん。

２人、拝む。

シャーロット　それから、みにくいアヒルの子のみなさんにもお礼を。
ジューン　え、どういうこと？
シャーロット　（客席に）ご協力ありがとうございました。
ジューン　ああ。（客席に）ありがとうございました。
シャーロット　でも、ドリーミィマッチ、ちょっともったいなかったね。
ジューン　うん。…でもしかたないよ。本当に叶えたい願い事なんて、そうしょっち

ゅうあるわけじゃないし。
シャーロット　宇宙のリンゴがかじられて、夢のマッチがそれを照らして・・・、いったい何が変わったんだろう？
ジューン　さあ。きっと少しだけ、何かを変えてきたんだと思う。
シャーロット　ふーん？
ジューン　女の勘よ。・・・あれ？
シャーロット　ん？
ジューン　これ？
シャーロット　どうしたの？

ジューン、ポケットからマッチを1本出して見せる。

シャーロット　それ？！ドリーミィマッチ？
ジューン　たぶん・・・
シャーロット　どうやって持ってきたの？
ジューン　わかんない。でも・・・
シャーロット　でも？
ジューン　ほら、まだこんなにあるの・・・。

ジューン、ポケットからマッチがザクザク。

シャーロット　ありゃー。
ジューン　ドリーミィマッチって・・・
シャーロット　うん。
ジューン　本当は何の役にも立たなかったのかもしれない。
シャーロット　これきっと、マッチ売りの少女のキーワードなんだわ。
ジューン　え？
シャーロット　デンマークコネクションの謎を解く鍵よ。ひとにはそれぞれのキーワードがあって。
ジューン　そのキーワードを唱えると。
シャーロット　ううん。心の中で、本当の気持ちを込めて叫ぶと、いつか願いが叶う。
ジューン　じゃあ、本当の失恋を知っている女たちのキーワードは？
シャーロット　決まってるじゃない。海には男の
シャーロット・ジューン　バカヤロー！

シャーロット、ジューン、ストップモーション。
その表情は、恋に破れたものとは思えないほど晴ればれと明るい。
高い位置に、マッチを持った少女が現れる。

侍女、妖精、マッチの精の姿も現れる。シャーロットとジューンの様子を覗いている。
少女、マッチを擦る。その炎はまばゆいほど明るい。

4　人

うーん。いい火加減だ。

〈　幕　〉